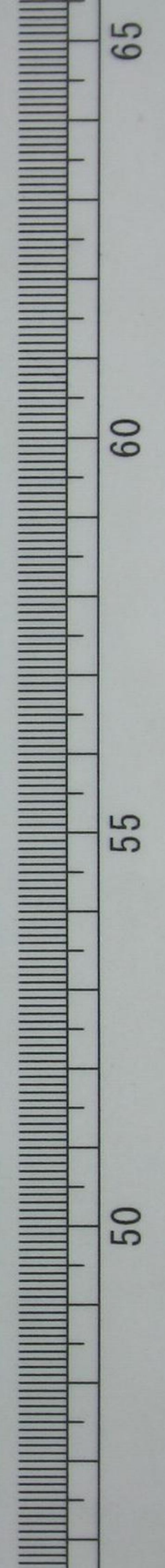


紙葉の巻

特別  
14  
696  
153





特  
696  
153



光國君

友公之印



如香  
玉果

Handwritten cursive text in three columns, likely a calligraphic inscription or signature.



おのゝしんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

5

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや

しんがらに申のうらや



陳西亭

又婦之志如海

之深之至辰

珍文館

義子





浮城志紀卷之二

つし菴許大作

伊勢の津でり川津の伊勢をりり

尾張の玉のにやを二人のうめけ物有

冬春の日のつりくるまふと伊勢

小つらまをて旅よまひくくしとや

とやおはしと笑ふ先琵琶鳴の栞と西を

東へこま東く西へくくく内へけくを



あろろと打ちまゝに 榎の権現あつり  
うしろなる小十六屋と云葉店有るを  
乾酒を呑みしりらるるいり守女も二  
三人つれとと孫傳け教えいとのつとを  
つりくゆりんのめり身の茶屋の女と  
しと丁三が粧あるをどうも玉の杜子美  
日本の世具之のうらまゝつてほど一里塚  
みろりやあてあつたのはやるを  
是又おろろんやうまゝいりあ  
二人俗共物たまたりたす凡の孫ちりも傳  
と花女のたはるり是うらるり  
乃中祀よるをとせん海

金鱗五層の御城と物々旭橋  
さそたすたらたいねた 二人が前の橋の下にのぞいたらうらまゝ  
たのま下りらるる杖橋の下にのぞいたら  
うらた二さんたらんと水のおもひで水車を米  
つりく大橋りまけらるるはてておおめ



















どちへいけんといふ

積三つつこうもよこる日本と

南いぶせんじくごめらる人々

争つていづつと面いふト此二斗のときよアし  
まわり尾のちとつ

あまのいづよーあまのいづらんといふ

ころんいぬえあまのいづあれといふ

使トもつりくーコレあまのいづいづらんが

しーあつらうおえも尾張のいれえん

とやうなるいづいづとあまのいづ

あまのいづト二人あう東のころんよりです  
いづんのききせいのあまのいづ二人うを

まろそあううをいづをいづいづ

あまのいづトいづるうあまのいづあまのいづ  
ハハブウリとあまのいづいづ

あまのいづいづいづいづいづいづ

ト二人あまのいづ  
いづのあまのいづいづいづいづ

あまのいづいづいづいづいづいづ

あまのいづいづいづいづいづいづ



















牛の尻尾を切るとして、  
牛の尻尾を切るとして、

三本、  
三本、

ウリ、  
ウリ、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

牛の尻尾を切るとして、  
牛の尻尾を切るとして、

三本、  
三本、

ウリ、  
ウリ、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、

ア、  
ア、



大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本

大根二本  
大根二本  
大根二本











ておしとれにまらたは...  
おしとるんおの...  
又都て...  
又うすゆてト

これれ 廣小路とぞ  
うしとぞに行よ



陰  
陽  
十  
九  
二



り

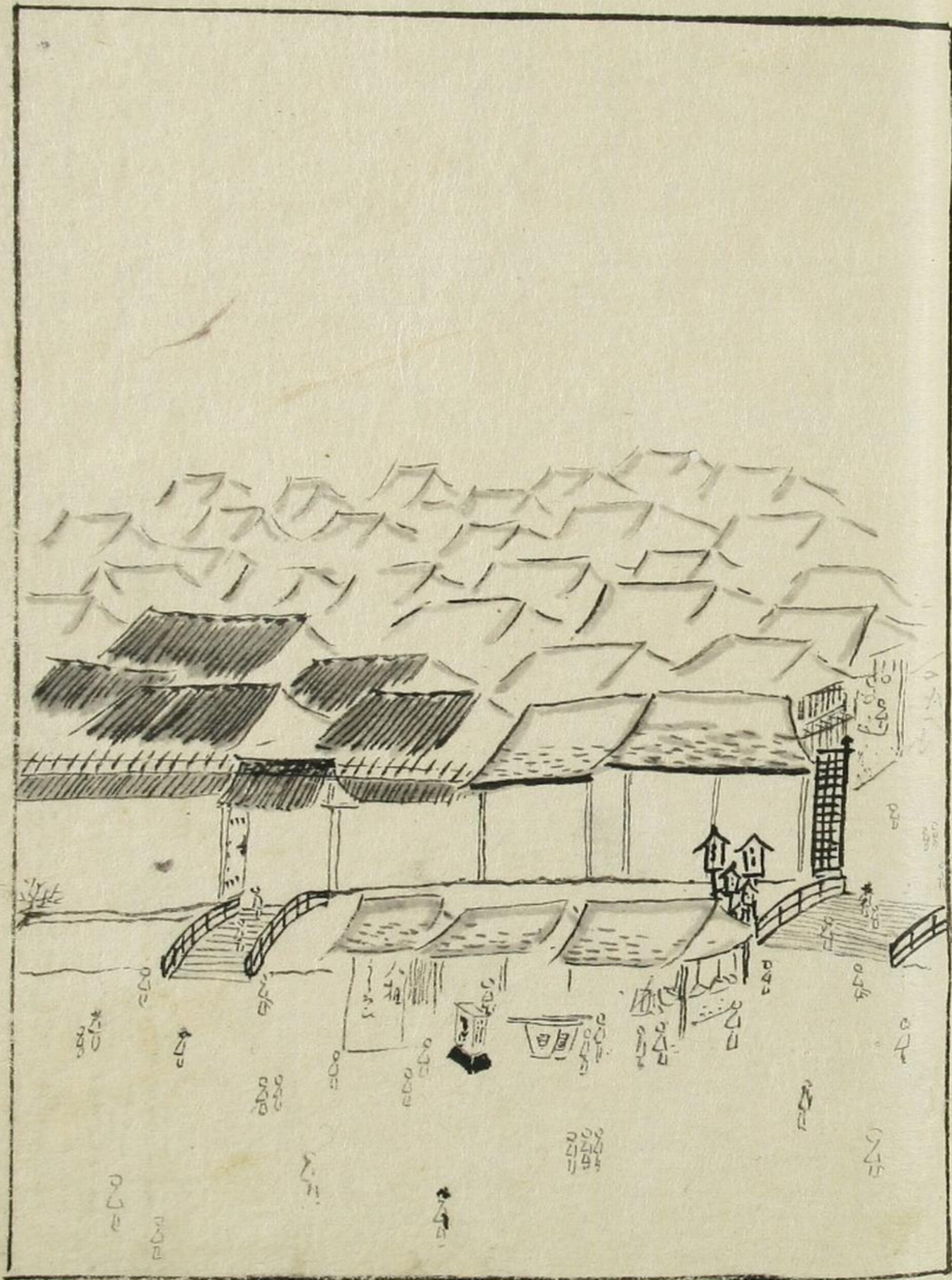
一寸おもしろく  
る  
二入つれまを一寸り  
ま

ふ  
い  
い

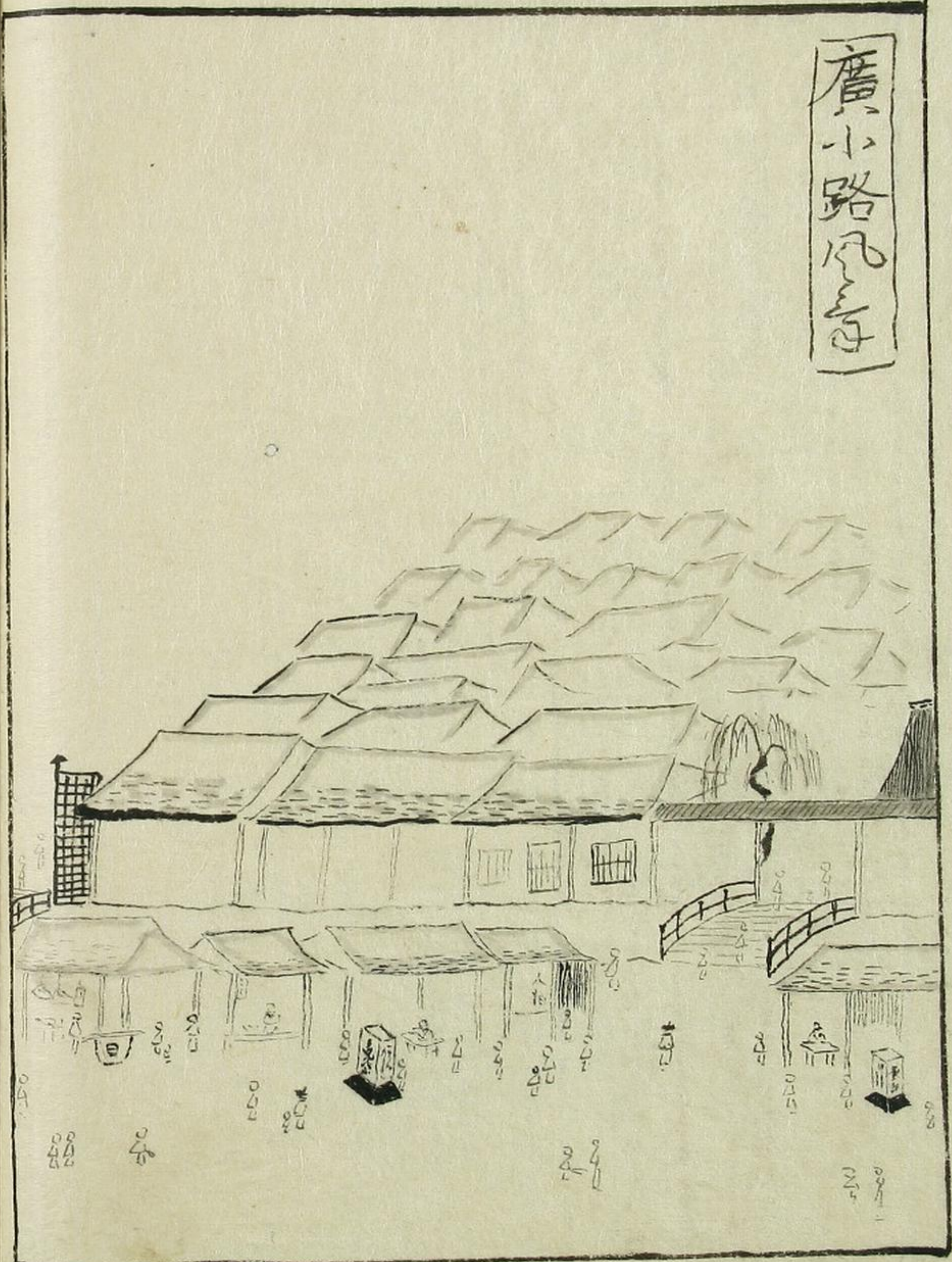
らん







廣  
小  
路  
風  
景





















いそぎの世にふりてびびるは

と云ふある人々を存ししに人なる業

をながりてあるるる日本志士の人が人

らきぬあはれしくいめたるるあめの人

車方他のもる人をつうてあろうと

入るのやうしつゝかんとて生るる

いふくある茶もあれとて茶あり

茶うまきとてさるるもふ

茶のてあうしつゝこれ又も一句ありて

とていふるといふていふるる

ありとてある茶といふぬいふらあり

とていふりかゝるるあれ人を

とやうしつゝこれに句白ト

とていふりかゝるるあれ人を

のちあるの種トよちたうていれいほこ

とていふりかゝるるあれ人を

とていふりかゝるるあれ人を

とていふりかゝるるあれ人を



















をさすりしとよよなる麻な人な  
<sup>ハ</sup>いふはしんるせうしんいしとあるを  
のゆら<sup>ハ</sup>いしんるせうしんいしとあるを  
ある物もそんるせうしんいしとある  
よのうすもさしんるせうしんいしとある  
<sup>ハ</sup>いふはしんるせうしんいしとある  
おそれけ  
又用方  
一人も

しんるせうしんいしとあるを  
しんるせうしんいしとあるを  
しんるせうしんいしとあるを

廿五文のふく<sup>ハ</sup>いしとあるを  
ありしとあるを  
<sup>ハ</sup>いふはしんるせうしんいしとあるを  
うしの様もさしんるせうしんいしとある  
るる

十分よ花  
しんるせうしんいしとあるを  
しんるせうしんいしとあるを  
しんるせうしんいしとあるを



花盛りの二人りりあきりし

とやうきいしはいしうちをいそ

の下のくろくせんとあはれより学問寺

をいりかきしるねぶくしき奇をまら

くろくのねぶくしき奇をまら

上人のおふたせきおとすのついで

くらふくしんておとすねくせむ

むきくしるねぶくしき奇をまら

牛のつらふくしんておとす

とやうきいしはいしうちをいそ

ゆりまきいしはいしうちをいそ

は寺よふあきりし

松をうらうら木園寺也

とやうきいしはいしうちをいそ

子アニは世を振片平治をいし

子アニは世を振片平治をいし











上より次上つれどおひ次上の中よりくるく  
 尺もあつてゆへに<sup>か</sup>今もあつてをうりて飛  
 のちをともせぬに<sup>か</sup>移る<sup>か</sup>座る子にるん  
 人うゆめておひ<sup>ト</sup>地築とんてある<sup>地</sup>地築上人  
 おちるる<sup>か</sup>移<sup>か</sup>地築<sup>か</sup>るる<sup>か</sup>女<sup>か</sup>花<sup>か</sup>あ  
 もちるる<sup>ト</sup>  
いといまを<sup>ト</sup>をり山<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>  
 へ行<sup>ト</sup>ふ<sup>ト</sup>

文化十三 丙 子年

仲春出来



























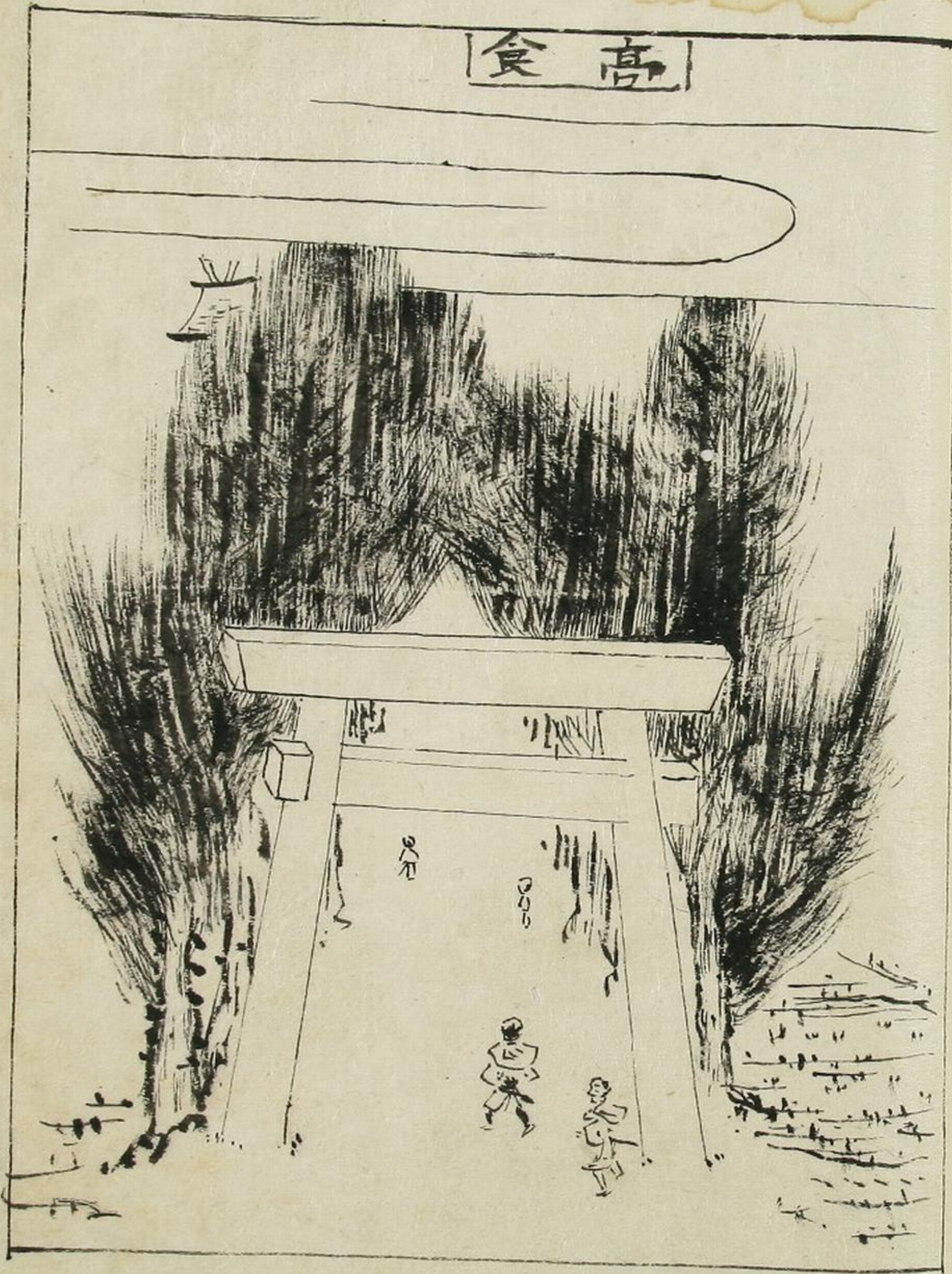






Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a fluid, connected style across multiple lines on both pages of the open book. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear. The script is dense and fills most of the page area.





あらゆるあはれくさしきりすもすせらるる  
 中下へくさしきりすもすせらるる  
 先づききりすもすせらるる  
 いあはれきりすもすせらるる  
 久しきりすもすせらるる  
 の方へまよひて  
 高食  
 あらゆるあはれくさしきりすもすせらるる



















しんれいせい入めて 世に江へのあまをくぬてり  
りりよ

すまらばくしんれいのとるるあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり  
あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

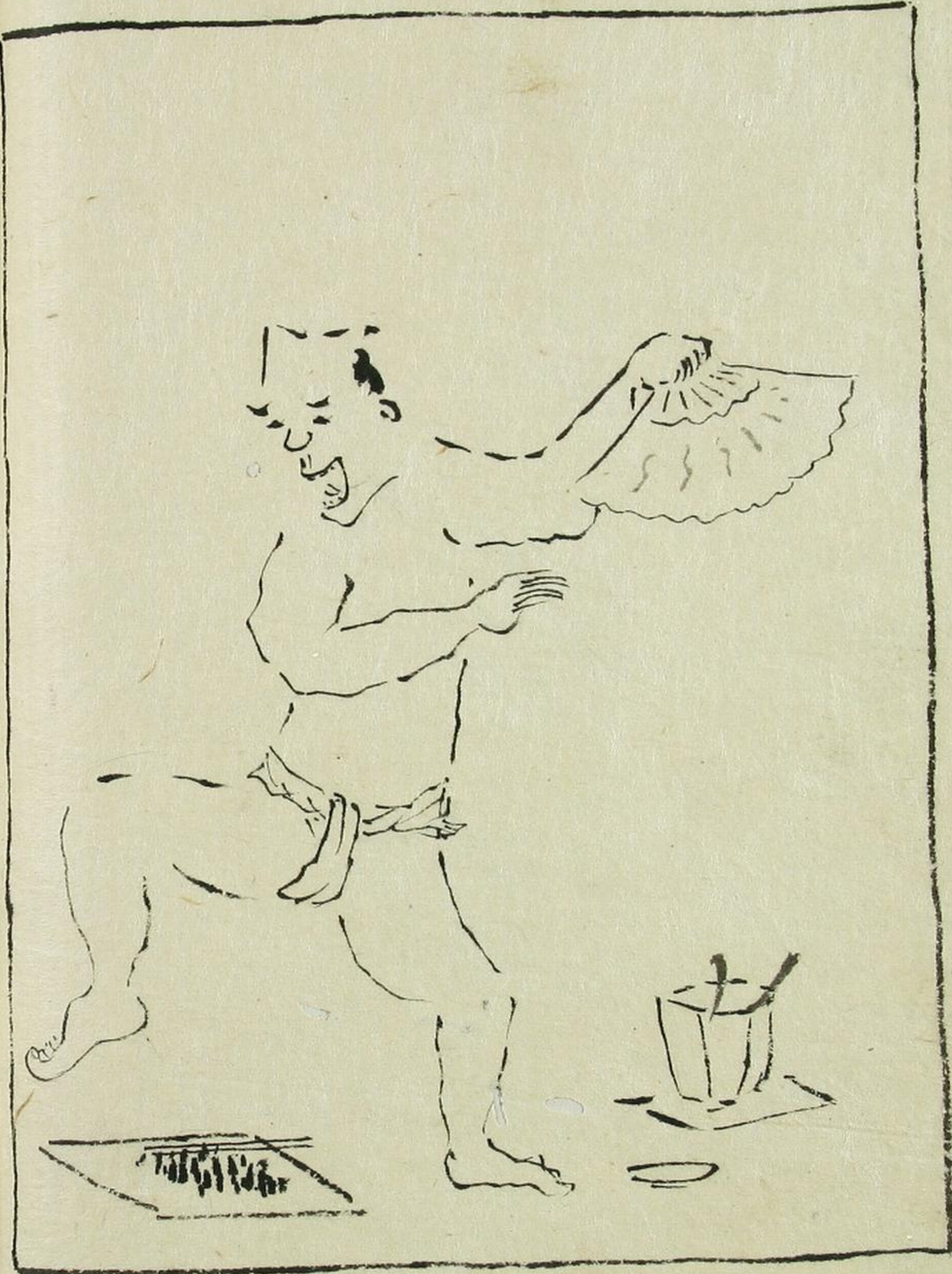
あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり

あまをくぬてりあまをくぬてりあまをくぬてり























文化十四丁

道中膝栗毛

十編舎一九作

浮世道中膝栗毛初編

十編舎一九著

花乃都と云はるゝり末長く猿橋を我  
神田八丁坊の物申の念も九々末荒八と  
活々末森を八々何様と末文も仕ぬ我  
又漱を末宮つゝ今何様と末文も  
うゝの夜もあゝ深川の宿より  
本とち散るゝる大表の表も  
十たも川崎乃六の



おまへにこそ御沙汰  
おまへにこそ御沙汰

せしめし御沙汰  
中へいりて居るにせしめし御沙汰

とあかきし御沙汰  
御沙汰

酒とれをこそ御沙汰  
御沙汰

アリアヤ押おまへにこそ御沙汰  
御沙汰

居る御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰

御沙汰  
御沙汰















とよけでなるといふとゆけり  
トハナカサキ  
ラサキ

ト荒はるる人のいふに  
トハナカサキ

いぢめ人のあやういふ  
トハナカサキ

見よとてと人よや  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ

ト  
トハナカサキ











































田舎の日記

全



二世話地檢盛衰記

十編全一凡作

いふとさうある程に地人の人もさうさ  
志せんと廣に武藝習ふ月日ともあげ  
立つて家系深く諸國うへ入込人と  
此の人と名家侍<sup>侍</sup>洪商人<sup>商人</sup>百万石とかけ  
物とみれ遠く程昌<sup>昌</sup>日本一乃國と  
なるよ京橋の角よ住つた二東京傳と  
日午一の作者の名人ありと云々六十余列























Handwritten musical notation on the right page, consisting of a single staff with a treble clef and various notes and rests.

Handwritten musical notation on the left page, consisting of a single staff with a treble clef and various notes and rests. Includes some vertical text on the far left edge.



























日本痴絶記







西の國に於ては  
佛の教を以て  
治す事と云ふ  
一の事なるを  
流す事と云ふ  
此の事なるを  
流す事と云ふ  
此の事なるを  
流す事と云ふ

ふみまふ  
下筆

佛法ノ天道此月正理ニアラサル事古ノ諸賢其ハ弁論  
甚明ニシテ掌ヲサスガコトクナシハ今サラ云ニハアラキト  
今又其法ヲ絶セルニ風ヲ書ス扱彼惡法我國渡リシ  
事ハ人王三十代欽明天皇十三年百濟國ヨリ我國  
ニワタリヌヤカテ國ニ疫癘アリテ民大ヲイタス故ニ  
佛像ヲ以テ難波ノ堀江ニスミテシム又敏達天皇十四  
年又佛法サカシニシテ疫疾流行シテ國將ニ絶ニトス  
故ニ此時始テ佛法スメリヌベカリシカ又佛法ハヤリテ  
今ニ盛ナリシ故ニ長命ナル者スクナシ故ニ無疾ナル  
者モ然リ佛法世ニナクニハ病ナクシテ長命ナル者  
多カルベキヲカナシニテ今筆ヲトリテニヨヒヲヒラケリ



叔我日本ノ清國ヲケガセシ惡法誠ニ衣裳ニ虱生ジ  
タル如ニシテ彼虱絶セルハエ湯ヲ以テ衣裳ニカケシハ  
コトクク虱絶ヌベケシト是ニテハ衣裳ソウドウニテ  
ケシハ國ソウドウスルニヒトシケシハ彼虱ヲヒニ見テ  
コトクク絶事シヅカニシテ絶ルナリ佛法ヲ絶セルモ是  
ニヒトシ

**考者** 今是ヲ見テ紙ヅウヘニシテ馬鹿ラシ  
キ事ト云分リ也是良藥逆口忠言違身  
教金言ト云ツベシ

誠佛法ト二者尊者ナラハ神武天皇ヨリ欽明天皇

王代開々

ルハ諸惡ニシツヘシ

六十一年之間ニ出ソウナル者出ナシダ

**考者** アル書ニ儒者ハ佛ヲ嫌ヒ惡ムナリ  
是大ヒナル誤ナリ先天下へ無禮ナリ天子  
高下王將軍モ皆佛ヲ敬ヒ崇給フナリ其  
土ニ生ル者カ色ノ惡法ヲ以テ佛道ヲ  
ソシリ佛ヲ嫌惡事不届千萬ナリ佛者  
ハ孔子ヲ不惡聖語ヲ用ユ儒者ハ佛ヲ  
ハ以ノ外トカケリイト笑ヘシ儒者  
佛道ヲ嫌ソウナルモノナルヘシ唐オニテ死シハ  
佛道ニ入論語爲政篇ニ樊遲曰何謂也  
子曰生事之以禮死葬之以禮祭之以禮  
ト有テ皆死スシハ佛道ニ入トイヘリ是大ヒ成  
マナカイナリ死葬之以禮トハ儒ノ法ナリ

子蓋シカ者ノ道ト云アリ  
伊テ佛ヲ嫌ムナリ

佛道ヲ嫌ソウナルモノナルヘシ唐オニテ死シハ

子曰生事之以禮死葬之以禮祭之以禮  
ト有テ皆死スシハ佛道ニ入トイヘリ是大ヒ成  
マナカイナリ死葬之以禮トハ儒ノ法ナリ



叔我日本ノ清國ヲケガセシ惡法誠ニ衣裳ニ虱生  
タル如ニシテ彼虱絶セルハ工湯ヲ以テ衣裳ニカケルハ  
コトクク虱絶ヌベケシト是ニテハ衣裳ソウドウニテ  
ケシハ國ソウドウスルニヒトシケシハ彼虱ヲヒニ見テ  
コトクク絶事シヅカニシテ絶ルナリ佛法ヲ絶セルモ是  
ニヒトシ

考者 今是ヲ見テ紙ヅウヘニテ馬鹿ラシ  
キ事ト云分リ也是良藥逆口忠言逆身  
教金言ト云ツベシ

誠佛法ト二者尊者ナラハ神武天皇ヨリ欽明天皇  
十三年元子百六十一年之間ニ出ソウナル者出ナシダ  
ルハ誠惡法ト云ツベシ

考者アル書ニ儒者ハ佛ヲ嫌ヒ惡ムナリ  
是大ヒナル誤ナリ先天下へ無禮ナリ天子  
帝下王將軍モ皆佛ヲ敬ヒ崇給フナリ其  
土ニ生ルハ者カ色ノ惡法ヲ以テ佛道ヲ  
ソコリ佛ヲ嫌惡事不届千萬ナリ佛者  
ハ孔子ヲ不惡聖語ヲ用ユ儒者ハ佛ヲ  
嫌不用ハ以ノ外トカケリイト笑ヘシ儒者  
ハ佛道ヲ嫌ソウナルモノナルヘシ唐オニテ死シハ  
佛道ニ入論語爲政篇ニ樊遲曰何謂也  
子曰生事之以禮死葬之以禮祭之以禮  
ト有テ皆死スルハ佛道ニ入トイヘリ是大ヒ成  
マナカイナリ死葬之以禮トハ儒ノ法ナリ



此の如くアキキ故也ト云  
テ、又チトハカリカ子ルヨクハハハ

何ゾ儒道デ佛道モ子ユヘキヤ又佛道ニテ  
し子ノ語ヲモ子ユルコトハ是法カアキキ故也  
ニシテ佛道ヲ不用神道ニシテ佛道ヲ  
不用是法也故ナリ佛道ニテハ儒道ヲ  
用ヒ神道ヲ用ヒテ我惡法ヘ引入ガタ也  
今人ヲ見ルニヨキ顔<sup>カハ</sup>志<sup>シ</sup>惡人<sup>ヲ</sup>多皆此タリ  
ヒナラシ

身ヲ終マテ善ヲナセ共善ハナヲタラサルカ如  
一日惡ヲ行ハハ惡ハナヲアミリアルトイヘルカ如  
神ノ道誠ニ善ニシテ其上人間ノ始ナレハ是ヲ  
トヤテウヘキ善ナレハ是ヲウヤミラ者スツナシ  
佛ハ是惡ナレハ其ヒレニ事<sup>ニ</sup>甚ハヤミコトニ

カナミムヘキカナ

園園誠アシキハ早ク弘ル事ハ今大勢アツ  
アリニ漸ヲスルニ人々ノ善ヲ云人々ニシテ  
人々ノ惡ヲ云者甚多ニ故ニ惡ハ早ク  
ヒロクニ事<sup>ヲ</sup>知ヘシ今子供ヲ見ルニ學子文  
ヲ教<sup>ヲ</sup>リテ家ニテ毎日一ツ事ヲキケトモ是ハ  
ヨウヲホヘスハヤリ歌ナト二三遍トハヤ子  
供<sup>ニ</sup>ハナクハワタラナリ誠ニ惡ハ早シ

今国ソウドウミテ清国トナスハワレタル箱ヲ針ヲ  
以テナサスコトシ古天地イニタ不別一ニカレタル  
ヲト<sup>ソ</sup>箱<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>モリテキサミタフクメルモハ  
雲霧<sup>ニ</sup>天<sup>レ</sup>ニエシルモノハツツイテ地トナリ日是一



何ゾ儒道デ佛道モチユヘキヤ又佛道ニテ  
孔子ノ語ヲモチユルコトハ是法カアキキ故也  
儒道ニシテ佛道ヲ不用神道ニシテ佛道ヲ  
不用是法也故ナリ佛道ニシテハ儒道ヲ  
用ヒ神道ヲ用ヒテ我惡法ヘ引入ガタ也  
今人ヲ見ルニヨキ顔<sup>カハ</sup>志<sup>シ</sup>惡人<sup>ヲ</sup>多皆此タリ  
ヒナラシ

身ヲ終マテ善ヲナセ共善ハナヲタラサルカ如  
一日惡ヲ行ハ惡ハナヲアミリアルトイヘルガ如  
神ノ道誠ニ善ニシテ其上人間ノ始ナレハ是ヲ  
ウヤテウヘキ善ナレハ是ヲウヤテウヤ者スナレ  
佛ハ是惡ナレハ其ヒレニ事<sup>ニ</sup>甚ハヤシコトニ

カナシムヘキカナ

園園誠アキキハ早ク弘ル事ハ今大勢アツ  
アリニ漸ヲスルニ人々ノ善ヲ云人々ニシテ  
人々ノ惡ヲ云者甚多ニ故ニ惡ハ早ク  
ヒロクニ事<sup>ヲ</sup>知ヘシ今子供ヲ見ルニ學子文  
ヲ教<sup>ヲ</sup>リテ家ニテ毎日一<sup>ツ</sup>事ヲキケト是ハ  
ヨウヲホヘスハヤリ歌ナトニ三遍トハヤ子  
供<sup>ニ</sup>ナクハウタラナリ誠ニ惡ハ早ク

今国ソウドウモテ清国トナスハワレタル箱ヲ針ヲ  
以テナタスコト古天地イニタ不別一<sup>ニ</sup>カレタル  
コト<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>子ノ如クモリテキサエタフクメルモノハ  
雲霧ニ天<sup>ノ</sup>レメリニエシルモノハツツイテ地トナリ日一



度りらりらるる天地生を此其後救年一合戦有テ  
今此御代納り又今又ソリドリモテ清國ニセハ  
誠ニ御代モ納りテ病無モテ大スルモノニナリ

**譯曰**誠ニイラサルコト心ヲイメムト  
ニ奮モタメシ予云 抱手ヲヨリシテヒ子ト  
ヤラ抱ヒテニコト風ニテゲリ又或人ノ云ハ俗ニ

世ノ中ニ子女程樂オキモノコト

ミラコタワケカ **チキテハタラツル**

トヤラ世ノ中ノ事アコトニ事ハナトイヘリ

日の子  
夫の子

**世事**ニテ子女オトラクハナキモノヲ  
知ラコタワケケヤサニ子タカリ

トコタヘタリ  
誠ニ佛法ト云テ有アリカセト **イニヒト** 予何故  
トトリ一死ニテ極樂へ行惣ニテ今其救多ト  
イヘ共成ハ空海ナトノナケ等ナト書多ク書傳  
しリ是フニキニテアリカセタリ

**考**昔佛ノアヤミキ事ハフミキニアラズ  
今ト豆落トラコトナトカク目ニ入鎌  
ヲ鼻ノ穴ニ入ル、ニ救萬ノ人、**眼**ニ入  
ニヒトシズ人云石ナトニ書南身ハ石  
ナトカ今ニ其ハヤルハカ **石** 谷曰 石ハ  
元出コモテ石ニナリタリナリ今クスノ根ハ  
山流川ハ木目アル石アリ **是** 本カ石ナリ



カルナリ石海をこへ手ノヒラ足ノララヒトツキタ  
五石是又土ノ石をニナリタリ云々又谷其山石ハ  
元土ナリトモ谷川ヲヘタテ、書之ハイカニテタ  
ニヨソコカ也信スルニタラス

又アル書有ニ天照大神ノ御タラセニ  
古ノ我名ヲ人ノアヲラワシテ

南無阿弥陀仏トイラゲラレキ

又佳者ノ歌トテ

河津池佛トトノフル人ノ平ナニクハ

我此國ノ神トイワシシ

ト有ニ神モ元ハ佛ナリト書タリ

何ノ神カ佛ナルヘキヤ歌ヲタテモコシラ

ヤツナリ

叔被憑信ヲ終ルハ今天下ヨリ國々へ命ヲ  
下シテ其國主領マヨリ其國ノ寺ニ  
先後寺へ觸ヲ出シテウニスル事ヨ  
世ホス史ヨリ半平ノ程スキテ皆寺ニ  
觸ヲ出シテ武ハ信海直書大言日南  
子ハ子共其寺ニイリタリアル事ヲ  
聞キテ大ニ人多人多シテイワセ  
中寺へ人殺チツカハニテメイガイ  
トワケメ小地ニ其國ヨリ知行出ス其  
知行志代ニアス凡百十年カ間ナリ  
信々へハ知行ハ元ノツトクニナリナリ



園カシノエトシ御觸出せる寺の  
色トト願出ルトカ思へリノカヨラ成  
事有共其寺ノノ事トリト事  
アルヘカラス

彼心約より二一年に程立テ又御觸出  
の寺ノニアラ大誠ニホトコト也イカヨラ成事  
アリトモ此後子孫出家ノ又サセル事カク  
キセイコトテカを隠居ホニ至ルニテテイハツ  
タス事セシセイナリトモ御觸出ル又  
ハ以後其子孫出家ニ至ル事ホカヨラ成  
下メソツカリシ御觸出ルニ天下へ出シ可ト事  
此後後通出テハ云々

- 一 後編... 佛法ノ事
- 一 凡人ノ事
- 一 凡人ノ事
- 一 凡人ノ事



→

抄

抄

抄





